

## 幼児期における自己制御機能発達に及ぼす 父母の養育態度の影響

尾崎 康子・小野由加利\*

### Effects of Parental Attitudes for Child Rearing on Self-Regulation in Preschool Children

Yasuko OZAKI and Yukari ONO

幼児期の子どもの自己制御機能の発達に対して親の養育態度がどのような影響を与えているかを調べるのが目的である。その際、自己制御機能を自己抑制と自己主張の2側面から検討した。また、先行研究では、母親の養育態度の影響だけを議論していたが、自己制御機能は父性に関連することが予想されることから、母親だけでなく父親の養育態度を調べ、その両者の影響を検討した。その結果、子どもの自己抑制は、父親の非難的養育態度の影響を受けており、父親の非難的養育態度が高いほど、子どもの自己抑制は低いことが示された。さらに、男女別に調べてみると、男児の自己抑制が父親の非難的養育態度の影響を強く受けており、父親の男児への関わりが重要であることが示唆された。

**キーワード**：自己主張，自己抑制，父母の養育態度，幼児期

**Keywords** : self-regulation, parental attitudes, child rearing, preschool children

#### 問題と目的

子どもの成長過程における中核的な課題として自己の発達がある。これまで自己の発達については、発達心理学、人格心理学そして臨床心理学などの分野で様々な研究が行われてきたが、それらを大きく分けると自己の認識と自己制御機能に関する二つのアプローチがある。柏木(1986)は、幼児期に子どもが日常生活において自己の行動を発現する際に、自己制御機能が大変重要となることに注目し、子どもの自己制御機能について詳細に調べた。この自己制御機能は、社会場面において自分の欲求や行動を抑制・制止する自己抑制と、自分の欲求や意志を明確にもってそれを主張し、他者や集団の中で協調的に表現する自己主張の2つの機能からなる(柏木, 1986)。

柏木(1988)は、子どもの自己制御機能発達に対して母親の養育態度がどのような影響を及ぼしているかを、幼稚園場面における担任教師の評定から検討した。その結果、この自己制御機能の発達には、母親の介入、干渉、過保護といった保護的な養育態度が関係しており、それらの養育態度が社会場面における子どもの自己抑制や自己主張の発達を妨げている可能性があることが示された。

また、森下(1999)は、親の統制が強ければ、子どもが主体的に判断し自主的に行動する態度や行動を育てることができなくなり、それが子どもの自己制御機能発達

へマイナスの影響を与えると考え、幼児期における子どもの自己制御機能の発達に対して母親が果たす役割を検討した。その結果、女兒については、母親の統制的養育態度が自己主張の発達にマイナスの影響をもたらす可能性を示唆した。このように、自己制御機能と養育態度との関係については、様々な先行研究が行われてきたが、それらは全て母親の養育態度を問題にしており、家庭で重要な役割を担っていると思われる父親の養育態度との関係については検討されてこなかった。

一方、近年、女性の社会進出に伴って父親の直接的な育児参加が求められるようになり、父親の育児参加による子どもへの影響についても研究が盛んになりつつある。母子にとって一番身近な父親の育児への積極的な参加や協力が、母親に安心感を与えるとともに、子どもに対してよりよい成長・発達を促すと言われている(数井・無藤・園田, 1996)。また、父親が身体を使って遊んだり、休日に子どもと遊んだりするのを楽しみだと感じている場合、子どもの自発性、言語性、社会性といった面で発達が促進することが報告されている(牧野・中野・柏木, 1996)。つまり、父親の育児参加は子どもの発達を促進し、子どもにプラスの影響を与えることが分かってきた。また、尾崎(2006)は、子どもの発達に対する父親と母親の拒否的養育態度の影響をパス解析によって検討したところ、父親の拒否的養育態度は直接的だけではなく、母親の拒否的養育態度を介して子どもの発達に影響を及

\* 富山大学教育学部生涯教育課程平成18年度卒業

ぼすことを指摘した。従って、子どもの発達に関しては、父親と母親両方の影響を調べる必要があると言える。

そこで、本研究では、幼児期における子どもの自己制御機能に対する父親と母親の両者の養育態度の影響を調べ、家族成員間のダイナミクスの中で、子どもがその影響を受けながら如何に自己制御機能を発達させるかを検討することを目的とする。

## 方 法

### 1. 対象者

T市内の私立幼稚園に在籍する年長クラスの子ども85名(男50名,女35名)とその父親及び母親85組。子どもの平均年齢は6.2歳,父親の平均年齢は37.5歳,母親の平均年齢は34.6歳であった。

対象児のきょうだい順位は,第1子が44名,第2子が32名,第3子が9名であった。父親の勤務形態は,自営業及び自由業が11名,雇用が71名であり,父親の勤務時間(残業時間,通勤時間を含む)は,平均10.9時間であった。最終学歴は,中学が10名,高校が38名,大学など(専門学校,専修学校,短期大学,大学院)が35名であった。母親の職業は,専業主婦が36名,パート勤務が33名,常勤が7名あった。なお,これらのフェース項目の未記入者は,それぞれの項目に,2名から9名だった。

### 2. 調査方法及び調査時期

父親と母親の調査については,幼稚園を通じて各家庭に質問紙を配布し,父親と母親それぞれに記入を依頼した。それらは,担任保育者を通じて回収した。子どもの調査は,担任保育者に記入を依頼した。これらの調査は全て2006年12月上旬に配布し,同年12月中旬に回収した。

調査はナンバリング方式で実施し,父親,母親,子どものデータを一致させた。113部配布し,93部回収した。回収率は82.3%であった。その内,記入が不十分なものや父子及び母子家庭を除き,85部を分析に使用した。

### 3. 調査内容

**父母の養育態度** TK式幼児用親子関係検査(品川・品川,1992)の保護的養育態度16項目の内10項目(干渉的養育態度5項目,心配的養育態度5項目),拒否的養育態度16項目の内10項目(不満的養育態度5項目,非難的養育態度5項目)の計20項目を用いた。4件法(1:ほとんどそうでない,2:あまりそうでない,3:少しそう,4:ほとんどそう)で父親と母親に尋ねた。これらは,TK式幼児親子関係検査の集計に従って,それぞれ5項目の得点を加算し,干渉,心配,不満,拒否の尺度得点とした。

各尺度内のCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ,父親では,干渉が $\alpha = .64$ ,心配が $\alpha = .68$ ,不満が $\alpha = .64$ ,非難が $\alpha = .83$ であった。母親では,干渉が $\alpha = .61$ ,心配が $\alpha = .66$ ,不満が $\alpha = .60$ ,非難が $\alpha = .69$ であり,父親と母親ともに概ね内の一貫性が認められた。

**子どもの自己制御機能** 柏木(1988)の自己抑制46項目と自己主張25項目の内,自己抑制の21項目,自己主張の21項目の計42項目を採用した。その際,森本(1999)を参考にして,有効な項目を決定した。4件法(1:ほとんどない,2:少ない方,3:やや多い,4:きわめて多い)で担任保育者に尋ねた。

**子どもの言語理解発達** KIDS乳幼児発達スケールTypeC(三宅,1989)の言語理解領域の16項目について,母親に記入をもとめ,「できるもの」に○を,「できないもの」に×をつけてもらった。KIDSの評定に従って,言語理解の発達月齢を算出した。

## 結果及び考察

### 1. 自己制御機能の因子分析

子どもの自己制御機能の42項目について,最尤法,バリマックス回転による因子分析を行ったところ,他の因子負荷量との差が僅少である項目が3項目見られた。それらの項目を除いて,再度39項目で因子分析を行った結果,2因子が抽出された(Table 1)。第1因子は,「先生や友達の話を終りまでしっかり聞く」「面白くなくても,終わりまで黙って人の話を聞く」「『してはいけない』といわれたことはしない」など,状況にあわせて自分を抑えることを表しており,自己抑制と名づけた。第2因子は,「それは違うとなかなか言えない(逆転項目)」「遊んでいるとき,ずるいことをした子に『だめ』という」「いやなことは,はっきり,『いや』という」など,自分の意見をはっきり言うことを表しており,自己主張と名づけた。第1因子と第2因子の項目は,それぞれ柏木(1988)の自己抑制と自己主張に分類された項目に対応している。内的整合性は,自己抑制が $\alpha = .839$ ,自己主張が $\alpha = .844$ であり,一定の信頼性が保証された。

### 2. 自己制御機能の属性による違い

自己抑制及び自己主張の性別による違いについてt検定を行ったところ,自己抑制では,女兒の方が男児よりも有意に高かったが( $t=2.31, p<.05$ ),自己主張では男女間に有意差はなかった( $t=0.66$ )。また,きょうだい順位(第1子,第2子,第3子)を独立変数,自己抑制及び自己主張を従属変数とする1要因分散分析を行ったところ,自己抑制と自己主張ともにきょうだい順の効果は有意ではなかった(自己抑制; $F=0.295$ ,自己主張; $F=0.885$ )。

### 3. 自己制御機能と生活年齢及び言語発達月齢との関係

子どもの自己制御機能を調べる際には,生活経験の高さや言語発達の高さが,自分を抑制したり,主張したりする能力を高めていることが考えられるため,自己制御機能と生活年齢及び言語発達年齢との相関関係を調べた。言語発達年齢は,KIDSの言語理解領域を換算表により算出した。その結果,自己抑制及び自己主張と生活年齢及び言語発達年齢との何れの間にも有意な相関は認めら

Table 1 幼児における自己抑制及び自己主張の因子分析（最尤法、バリマックス回転）

	因子		共通性
	I	II	
<b>第1因子 自己抑制 (<math>\alpha=0.839</math>)</b>			
01 先生や友達の話をつわりまでしっかりと聞く	.844	.006	.717
12 面白くなくても、つわりまで黙って人の話を聞く	.831	-.149	.712
02 「してはいけない」といわれたことは、しない	.828	-.005	.687
03 他の子の話を最後まで聞いてから、自分が話をする	.826	-.175	.713
04 人が見ていないとき、ルールを守らないことがある	-.784	-.008	.622
14 先生が話している時、退屈するとよそ見をしたり手遊びをしたりする	-.773	-.002	.598
05 遊びのとき、自分の順番がくるまで待てる	.748	.004	.561
21 自分の使いたい遊び道具を、かわりばんこに使える	.743	.003	.553
18 遊んでいるとき、きちんとルールを守れる	.743	.234	.606
17 「あとにきなさい」といわれれば、待てる	.723	.155	.547
06 欲しいものがすぐに手に入らなくても、がまんできる	.720	.006	.521
07 難しいことでも、あきらめずにやる	.673	.005	.455
09 時間がかかっても、最後までがんばる	.650	.106	.433
20 いやなことを言われても、言い返したり怒ったりしない	.638	-.271	.480
13 たたかかれても、すぐにたたきかえさない	.633	.001	.400
10 やりたくないことでも、やらないといけないときはやる	.616	.299	.469
19 だれかに注意されなくても、きちんと順番に並べる	.597	.204	.398
11 すこしぐらい、いたずらされても怒らない	.594	-.323	.457
08 ちょっと失敗したりうまくいかないと、すぐあきらめる	-.492	-.105	.253
16 人のものを勝手にさわったり、使ったりしない	.455	.182	.240
<b>第2因子 自己主張 (<math>\alpha=0.844</math>)</b>			
10 それは違うとなかなか相手に言えない	.010	-.821	.684
02 遊んでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という	.131	.786	.635
12 いやなことは、はっきり「いや」という	.005	.780	.611
09 友達にいじわるされたり、嫌なことを言われたりした時「やめて」という	.127	.774	.615
01 自分の番に誰かが割り込んできたとき、「順番を抜かさないで」という	.208	.770	.637
07 自分の席に座っている子にどいて欲しいとき、「どいて」という	-.007	.760	.583
16 人に聞かれたら、はきはき答える	-.004	.753	.568
15 自分の思ったことを、みんなの前でなかなか口に出していえない	.215	-.736	.587
03 いやなことを言われたりされたりした時泣いたり黙ってしまったりする	-.116	-.730	.547
18 他の人と意見が違っていても、自分の意見をいう	-.116	.722	.534
08 してほしいこと、欲しいものをはっきり大人に頼む	.101	.719	.528
20 何かしていて分からないとき「教えて」という	.159	.700	.480
06 遊びたくないとき、「遊べない」という	.001	.681	.463
04 やり方が分からないとき自分から「どうするの」と聞く	-.001	.676	.457
13 自分のものをとられたとき、「かえして」という	.276	.668	.523
19 入りたい遊びに、自分から「いれて」という	.360	.646	.547
17 進んで手を挙げて発表する	-.008	.638	.415
14 けんかをしている子に「けんかをやめて」という	.000	.623	.388
05 ふざけている子に「きちんとして」という	.001	.584	.341
	因子寄与率(%)	28.67	24.16
	累積寄与率(%)	28.67	52.83

れなかった（自己抑制－生活年齢； $r=.047$ ，自己抑制－言語発達年齢； $r=.189$ ，自己主張－生活年齢； $r=.158$ ，自己主張－言語発達年齢； $r=.191$ ）。従って、本研究の自己制御機能は、年齢や言語発達を反映していないことが確認された。

#### 4. 父母の養育態度における子どもの性別及びきょうだい順位による違い

子どもの性別によって、親の養育態度が異なるかどうか

かを調べるために、父親と母親の干渉、心配、不満、非難の養育態度における性差についてt検定を行ったところ、何れについても有意差は認められなかった（父親干渉； $t=-1.305$ ，父親心配； $t=-1.163$ ，父親不満； $t=-0.430$ ，父親非難； $t=0.919$ ，母親干渉； $t=-0.579$ ，母親心配； $t=0.643$ ，母親不満； $t=-0.993$ ，母親非難； $t=0.351$ ）。従って、父親も母親も子どもの性別によって養育態度が変わらないことが示された。

また、子どものきょうだい順位によって、親の養育態度が異なるかどうかを調べるために、きょうだい順位を独立変数、養育態度を従属変数とする1要因分散分析を行った (Table 2)。母親では、心配、不満、非難の養育態度できょうだい順位の効果が有意であった。また、干渉的養育態度では有意傾向がみられた。さらに、LDS法を用いた多重比較を行うと、心配、不満、非難の何れについても第1子が第2子及び第3子以上よりも有意に高かった ( $p<.05$ )。父親では、心配的養育態度においてきょうだい順位の効果が有意であったが、他の養育態度は有意でなかった。さらにLDS法により多重比較を行ったところ、父親の心配的養育態度は、第1子が第2子及び第3子以上よりも有意に高かった ( $p<.05$ )。母親では、保護的、拒否的のどちらの養育態度についても、第1子で顕著に現れることが示された。父親では、母親に比べて第1子に顕著に現われてないが、心配的養育態度だけは、第1子がそれ以外よりも高かった。

#### 5. 父母の養育態度における親の勤務状態による違い

父親の勤務形態を自営・自由と雇用に分類して、父親と母親の養育態度の勤務形態の違いについてt検定をおこなった。その結果、父親と母親の何れの養育態度についても有意な違いは認められなかった (父親干渉;  $t=-1.773$ , 父親心配;  $t=-0.262$ , 父親不満;  $t=-1.654$ , 父親非難;  $t=1.061$ , 母親干渉;  $t=-0.907$ , 母親心配;  $t=0.694$ , 母親不満;  $t=-0.688$ , 母親非難;  $t=1.060$ )。父親の勤務形態は、父親本人の養育態度にもまたパートナーの母親の養育態度にも影響を与えることはなかった。

一方、母親の勤務状態を専業主婦、パート勤務、常勤

の3つに分類し、勤務状態を独立変数、養育態度を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果、父親と母親の何れの養育態度についても母親の勤務状態の効果は有意でなかった (父親干渉;  $F=0.050$ , 父親心配;  $F=1.377$ , 父親不満;  $F=0.927$ , 父親不満;  $F=0.927$ , 母親干渉;  $F=0.421$ , 母親心配;  $F=0.264$ , 母親不満;  $F=0.293$ , 母親不満;  $F=0.026$ )。母親が専業主婦として子どもに長時間かかわっていても、常勤の仕事をもちながら子育てしていても、母親の養育態度もまたパートナーの父親の養育態度も変わらないことが示された。

#### 6. 子どもの自己制御機能と父母の養育態度との関係

子どもの自己制御機能が父親及び母親の養育態度と如何なる関係があるかを調べるために、それぞれの尺度間の Pearson 積率相関係数を求めた (Table 3)。子どもの自己抑制は、父親の非難的養育態度との間に有意な負の相関が認められたが、その他の父親及び母親の何れの養育態度とも相関は認められなかった。また、子どもの自己主張は、父親及び母親の何れの養育態度とも相関は認められなかった。この結果から、父親の非難という拒否的養育態度が高いほど、子どもの自己抑制は低いことが示されたが、これは、父親が子どもに対して拒否的養育態度で接している場合、子どもは自分の欲求や行動を制御することができなくなることを示唆している。また、子どもの自己制御機能は、母親からではなく、父親の養育態度と関係していることが示された。

次に、子どもの自己制御機能と父親及び母親の養育態度と関係について男児と女児で違いがあるかを調べるために、性別にそれぞれの尺度間の Pearson 積率相関係数

Table 2 子どものきょうだい順における父親母親の養育態度の平均値と1要因分散分析結果

養育態度		①第1子	①第2子	①第3子	F 値 (2,82)	
		N=44 平均値 (標準偏差)	N=32 平均値 (標準偏差)	N=9 平均値 (標準偏差)		
父親	干渉	10.05 (2.22)	9.56 (2.54)	9.44 (2.65)	0.490	
	心配	11.89 (2.43)	10.31 (2.88)	9.56 (2.35)	5.040**	①>②,③
	不満	8.89 (1.88)	9.06 (2.70)	8.44 (1.67)	0.278	
	非難	11.36 (2.89)	11.53 (3.48)	9.33 (3.46)	1.776	
母親	干渉	10.59 (2.18)	10.69 (2.25)	8.67 (2.92)	2.982 <sup>+</sup>	
	心配	13.30 (2.49)	11.72 (2.80)	10.44 (2.01)	6.398**	①>②,③
	不満	10.48 (2.05)	9.41 (2.18)	7.89 (1.83)	6.689**	①>②,③
	非難	13.57 (1.56)	12.50 (2.86)	10.89 (3.02)	5.807**	①>②,③

<sup>+</sup> $p<.10$ , \*\* $p<.01$

Table 3 子どもの自己制御機能と父親及び母親養育態度との相関関係

	父親養育態度				母親養育態度			
	干渉	心配	不満	非難	干渉	心配	不満	非難
自己抑制	-.002	.102	-.121	-.279**	-.090	.114	-.096	-.113
自己主張	-.081	-.004	-.031	.051	.033	-.059	.042	.007

\*\* $p<.01$

Table 4 性別における子どもの自己制御機能と父親及び母親養育態度との相関関係

		父親養育態度				母親養育態度			
		干渉	心配	不満	非難	干渉	心配	不満	非難
男児	自己抑制	-.044	.021	-.128	-.387**	-.210	.046	-.215	-.187
	自己主張	-.035	-.132	-.021	.053	.075	-.139	.057	-.015
女児	自己抑制	-.031	.161	-.152	-.074	.046	.296	.020	.013
	自己主張	-.212	-.235	-.062	.069	-.061	.133	-.013	.057

\*\*p<.01

を求めた (Table 4)。男児では、自己抑制と父親の非難的養育態度との間に有意な負の相関が認められた。しかし、自己主張は父親と母親の何れの養育態度とも有意な相関は認められなかった。女児については、自己抑制と自己主張ともに何れの親の養育態度との間にも有意な相関は認められなかった。従って、父親の非難といった拒否的養育態度が高いほど、子どもの自己抑制は低いという前述の結果は、女児ではなく男児に特徴的に現れていることが示された。

#### 7. 子どもの自己制御機能を規定する父母の養育態度

父親及び母親の養育態度が子どもの自己制御機能にどのように影響しているかを検討するために、子どもの自己抑制を従属変数とし、父親及び母親の養育態度の8尺度を独立変数として、ステップワイズ法の重回帰分析を行った。その結果、自己抑制について、父親の非難的養育態度から有意な負の影響が見られた ( $R^2=.078$ ,  $\beta=-.279$ ,  $p<.01$ )。

次に、男児の自己抑制を従属変数として、父親及び母親の養育態度の8尺度を独立変数として、ステップワイズ法の重回帰分析をおこなった結果、男児の自己抑制について、父親の非難的養育態度から有意な負の影響が見られた ( $R^2=.150$ ,  $\beta=-.387$ ,  $p<.01$ )。

### 総合的考察

河合 (1997) は、母性の原理を「包含する」、父性の原理を「切断する」として捉え、全ての子どもを無条件で愛し、限りなく受け入れ、包み込む母性に対して、善悪や優劣のけじめをはっきりとさせるのが父性であると述べている。また、家族の中で、父親は目標を定めてメンバーを引っ張る「道具的 (instrumental)」な態度を、母親が様々な不調をなだめる「表出的 (expressive)」な態度をとることが多いと言われている (牧野他, 1996)。このように、父親と母親では、家族の中での役割が異なることが指摘されているが、母親が子どもの自己を包み込み受容する機能を果たすのに対して、父親は包み込まれた子どもを切断し、自己にけじめと決断を迫る機能と言えよう。自己制御機能を、自己を制御して決断していくことが求められるとすると、子どもの自己制御機能は、父性そして父親の特性と関係しており、父親の影響を大

きく受けることが考えられる。子どもの自己制御機能が、母親よりも父親の養育態度に大きく影響を受けているという本研究の結果は、これを支持するものとなった。実際には、父親の非難的養育態度が高いほど、子どもの自己抑制が低かったが、父親から非難され拒否的に扱われると、子どもは父親から自己のけじめや決断を迫ることを習得できず、安定した自己制御が難しくなることが考えられる。適正な父性が施されなければ、子どもの自己制御の獲得にマイナスに働くと見えよう。また、今回の研究対象である母親は、専業主婦が大半であり、子どもと接する時間は、父親よりも圧倒的に長いことが予想される。幼児の発達を扱った大概の研究では、母親の影響が大きく父親の影響が極めて少ないこと、あるいは父親は母親を介して子どもに影響を与えることが報告されていることから (例えば、一条, 2005; 尾崎, 2006)、子どもの自己抑制機能に対する父親の直接の影響の大きさが分かる。

さらに、父親の影響は、女児ではなく男児の自己抑制機能に及ぼされていた。フロイトは、人格発達において幼児期のエディプスコンプレックスを重視したが、男児は同性の父親に同一化し、それを自己の中に取り入れたり、同性の父親を自分のモデルとして、その影響を受けることが考えられる。特に、自己制御機能という父性や父親の役割と関連した側面に対しては、同性の男児が影響を受けることが考えられるであろう。本研究では、父親の非難といった拒否的養育態度が強いと男児の自己抑制が低いという結果が示された。父親が男児に対して、頭ごなしに叱ったり、どなりつけたりして、男児を拒否して認めないと、男児は父親に同一化して自分のアイデンティティを獲得することができず、安定した自己のもとに自分の欲求や行動を制御できなくなることが考えられる。また、父親が情動を制御しないままにどなったり、強く叱ったりすると、男児は、そのような同性の父親の行動をモデルとして、自分も他者に対して父親と同じ行動をとることも考えられる。

本研究において、幼児期における子どもの自己制御機能発達と父母の養育態度の関係を調べたところ、父親の非難的養育態度が子どもの自己抑制の発達に影響を与えていた。従来、母親に比べて、子どもの発達に対する父親の影響の低さが報告されてきたが、父親の養育態度の

影響が顕著に示された本研究の知見は、子どもの自己制御機能を適正に発達させるためには、父親の子どもへの関わりが重要であることを示唆することとなった。

しかし、本研究では、子どもの自己主張と親の養育態度との関係は認められなかった。柏木(1988)は、母親が過保護的に接しないほど子どもの自己主張が高いことを報告しているが、その調査内容は、「一人で近くのお店に一人でお使いを頼む」「お風呂で一人で体を洗わせる」「家の中では少々のいたずらをして叱らない」など子どもの自立を促す項目が多く含まれていた。一方、本研究の過保護的養育態度に関する調査内容は、「子どもの遊び方に口を出す」などの干渉的項目や「子どもが友達にいじめられているのではないかと心配で確かめる」などの心配的項目であり、子どもの自立行動との直接的な関係が弱かった。今後、親の養育態度の内容を精査して、子どもの自己主張に及ぼす影響を検討していく必要があるであろう。

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり、調査に協力していただいた保護者の方々、幼稚園の先生方に心から感謝を申し上げます。

## 引用文献

- 一条智康 2005 子どもの行動および情緒の状態に対する両親の精神健康面の問題の影響について 心身医学, 45, 231.
- 柏木恵子 1986 自己制御 (self-regulation) の発達 心理学評論, 29, 3-24.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会
- 河合隼雄 1997 母性社会日本の病理 講談社
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房
- 三宅和夫監修 1989 KIDS 乳幼児発達スケール (Type C) (財)発達科学研究教育センター
- 森下正康 1999 幼児期の自己制御機能の発達(1) — 思いやり, 攻撃性, 親子関係との関連 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学), 50, 9-24.
- 尾崎康子 2006 幼児の攻撃性に影響を与える愛着と父親母親の諸要因 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 346.
- 品川不二郎・品川孝子 1992 TK 式幼児用親子関係検査 田研出版株式会社

## 付 記

本研究は、2006年度富山大学教育学部生涯教育課程発達臨床専攻の特別研究(小野)を尾崎が再分析及び改稿したものである。

(2007年8月31日受付)

(2007年10月23日受理)